

付章 I 天平大仏殿の裳階まわり

1 はじめに

天平大仏殿は、天平塔に先立って天平勝宝4年(752)にほぼ完成したとみられている¹⁾ (Fig. Appx. I-1-1)。天平大仏殿は、平城京内最大級であった平城宮第一次大極殿の4倍以上の面積を有する、未曾有の規模の建物であり、その造営にあたって建築の技術革新があったことは想像に難くない。その技術をもって、次いで天平塔の造営が着手された。

本章は、天平塔の類例である、同時代・同境内の天平大仏殿について検討をおこない、天平塔の復元の基礎資料を得ることを目的とする。天平大仏殿は天平塔より大規模であり、また復元に関する資料も比較的豊富である。ここでは各種の資料にもとづき、特に裳階の組物を中心に検討する。なお、本章の一部は『奈良文化財研究所紀要』にて中間報告をおこなった²⁾。

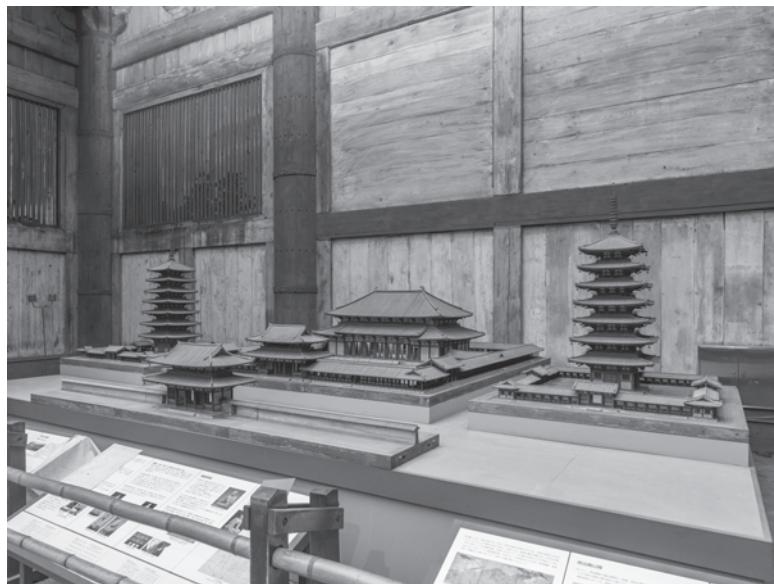


Fig. Appx. I-1-1 奈良時代創建東大寺伽藍復元模型 (天沼俊一監修)

註

- 1) 講堂の造営が天平勝宝5年(753)正月に着手されていることなどから、天平大仏殿の造営時期が推定されている。
福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大仏殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、14-34頁、毎日新聞社、1952。
- 2) 太田博太郎『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店、1979。初出は、太田博太郎「東大寺の歴史」『奈良六寺大觀第9卷東大寺1』解説7-19頁、岩波書店、1970。
- 2) 目黒新悟「大仏殿の検討を踏まえた組物と軒の復元 東大寺東塔の復元研究5」『奈良文化財研究所紀要2022』3-5頁、奈良文化財研究所、2022(DOI <http://doi.org/10.24484/sitereports.129169>)。

2 前提条件と資料

A 発掘調査

天平大仏殿の基壇とその周囲は、昭和34年(1959)と平成5年(1993)に発掘調査がおこなわれた(Fig. Appx. I-2-1)。昭和34年の発掘調査の報告を確認することができなかつたが、1959年調査区の遺構図から¹⁾ (Fig. Appx. I-2-2)、天平大仏殿の地覆石外縁は、想定される当初裳階柱筋から18.0尺外側の位置にある。つまり、天平大仏殿の基壇の出(裳階柱筋～地覆石外縁)は、18.0尺と考えられる。これは、後述する文献史料に記載のある、基壇規模(地覆石外縁の対辺間距離)と建物規模との差と符合する。

1959年調査区および9305区の検出遺構から、天平大仏殿の基壇外装は地覆石の下に延石が備わる形式と判明する。地覆石外縁からの延石外縁の出は、天平塔と同じく1.4尺とみられる²⁾。延石の外側には、幅約4mの石敷が巡る。天平大仏殿の裳階柱筋～延石外縁は19.4尺あり、裳階の軒の出は20.0尺以上を想定でき、これは天平塔より大規模である。

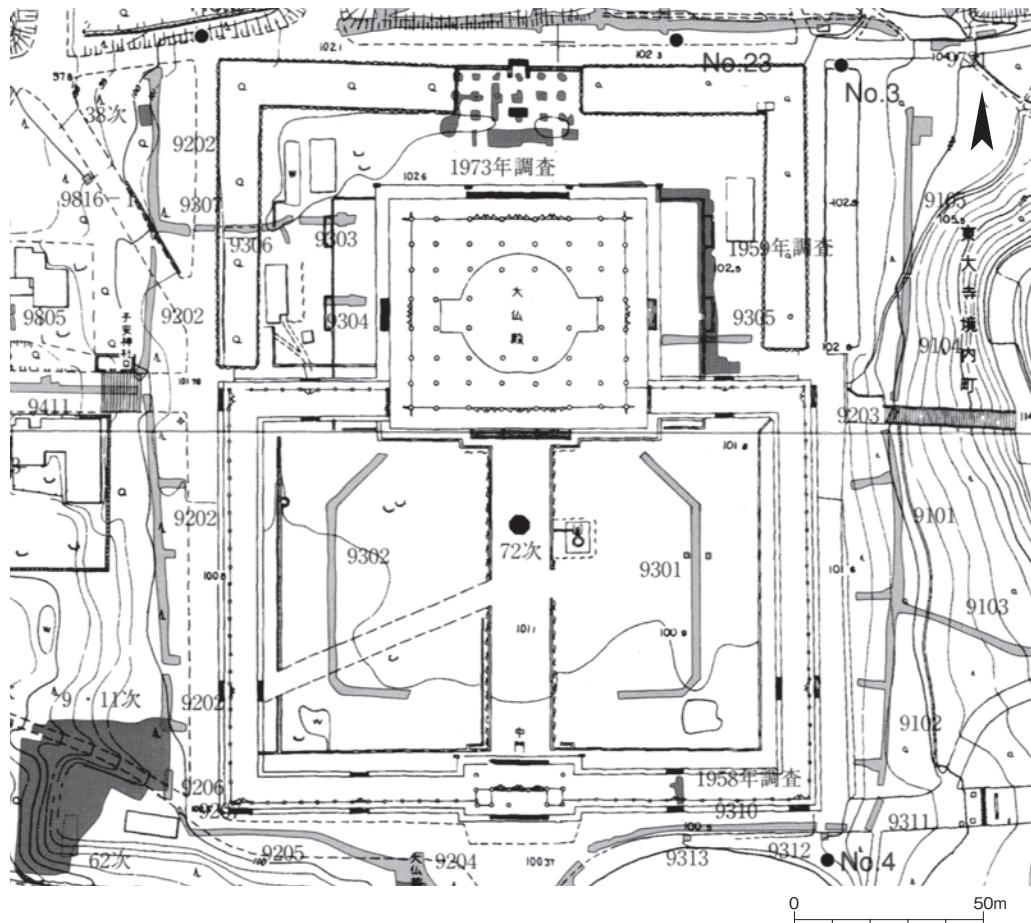


Fig. Appx. I-2-1 東大寺大仏殿院 調査区位置図 1:2,000

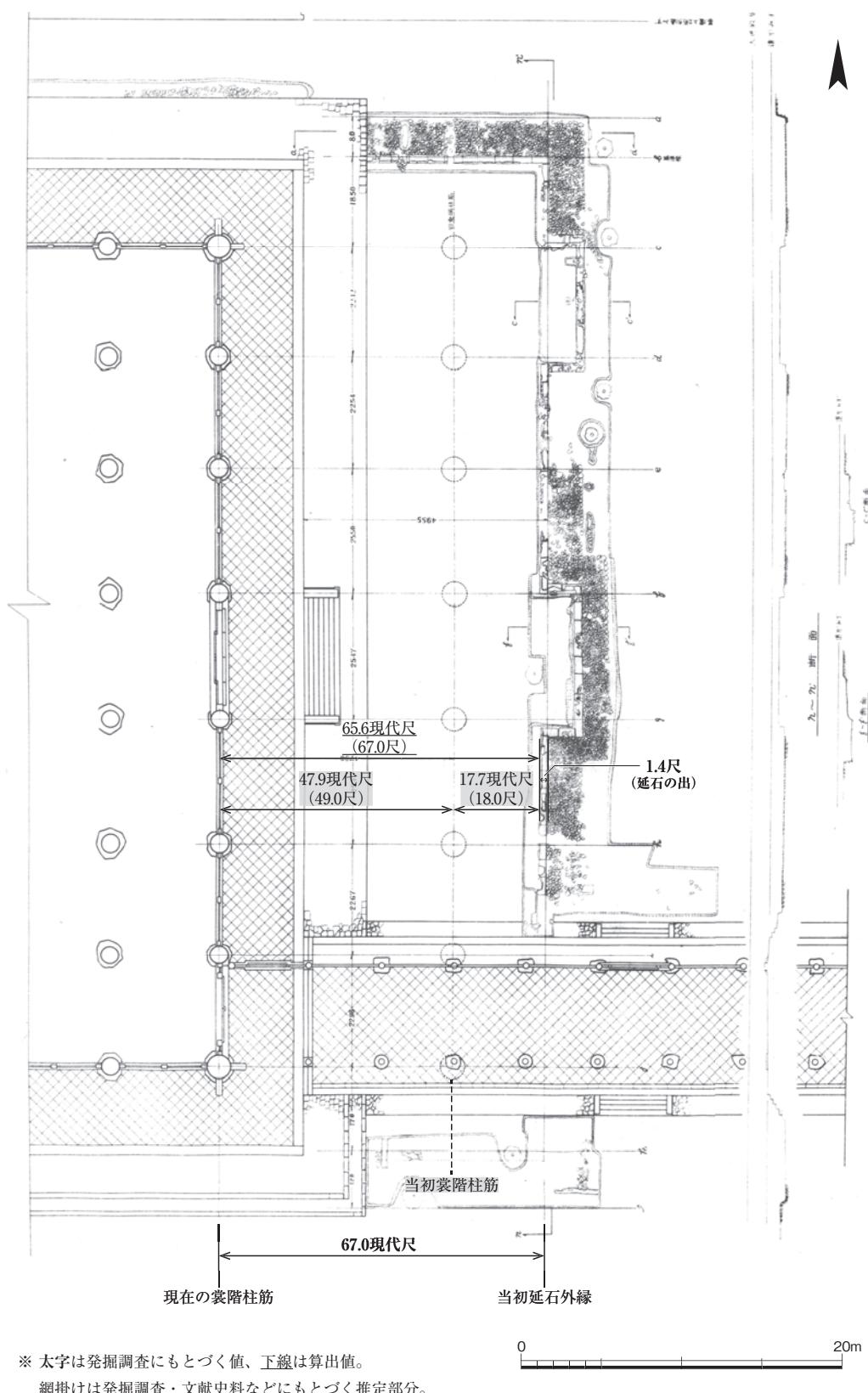


Fig. Appx. I -2-2 東大寺大仏殿跡 1959年調査区遺構図 1:400

B 資 料

天平大仏殿の復元に関する主要な文献史料・絵画資料として、以下のものが挙げられる。後述する先行研究は、これらの資料や現在の大仏殿との比較などから検討がおこなわれた。

①『東大寺要録』巻2縁起章「大仏殿碑文」(図版第一図)、『朝野群載』巻16仏事上「東大寺大仏殿仏前板文」(図版第四~一二図)、『扶桑略記抄』孝謙天皇・彼寺築立障子記(図版第一三・一四図)、『七大寺日記』「東大寺」(図版第一五図)など³⁾：基壇・建物の規模。

これらの文献史料には、建物の間口290尺、奥行170尺で、基壇の間口326尺⁴⁾、奥行206尺と記される。後述するように、高さは諸説ある。

②『東大寺要録』巻7雜事章「東大寺權別當實忠二十九箇条事」：改修と光背。

この文献史料には、副柱を立てて補強したことや、天井を切り上げて光背を納めたことが記される。

③『七大寺巡礼私記』「東大寺高広丈尺柱戸棟等事」：柱の本数・寸法。

この文献史料には、84本の柱があり、すべての柱が下径3.8尺、上径3.0尺と記される⁵⁾。

④正倉院文書：軒支輪板と裳階・軒の天井など。

この文献史料には、長さ3.5尺の軒支輪板が816枚あることや、天井板の彩色などについて記される。

⑤朝護孫子寺所蔵『紙本著色信貴山縁起』(図版第37図)：正面外観。

この絵画資料には、天平大仏殿の正面外観が描かれる。組物については大斗、枠肘木、手先の枠肘木、尾垂木と円形断面の地垂木が描かれるが、組物形式は判然としない⁶⁾。なお、尾垂木は各組物に1本のみが描かれる。

⑥宮内庁正倉院事務所所蔵『東大寺山堀四至図』：正面外観。

この絵画資料には、寄棟造に裳階が取り付くかたちで天平大仏殿の正面外観が描かれる。

C 先行研究

i 規模・形式

主要な先行研究として、関野貞、福山敏男、山本栄吾らによって復元検討がなされており⁷⁾、海野聰が再検討をおこなった⁸⁾。天平大仏殿は、身舎と廊からなる主屋に裳階が取り付く単層裳階付きの形式(外観二重屋根)であり、桁行7間、梁行3間の身舎の四周に、廊と裳階が各1間巡ると考えられている(Fig. Appx. I-2-3)。すなわち、建物は間口11間、奥行7間の大規模なものである(Fig. Appx. I-2-4)。屋根は、寄棟造と入母屋造の両説がある⁹⁾。後述する文献史料にみえる柱本数と柱高から、裳階は正面中央7間で切り上ると考えられている。

天沼俊一は、天平大仏殿を含む奈良時代創建の東大寺伽藍の復元模型の作成を監修した。福山敏男と海野聰は、主屋、裳階とともに三手先組物、二軒でそれぞれ復元断面図を作成したが(Fig. Appx. I-2-5・6)、細部の形式や寸法についてはあきらかでない。

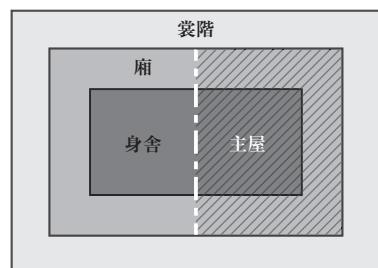


Fig. Appx. I-2-3 天平大仏殿
平面模式図

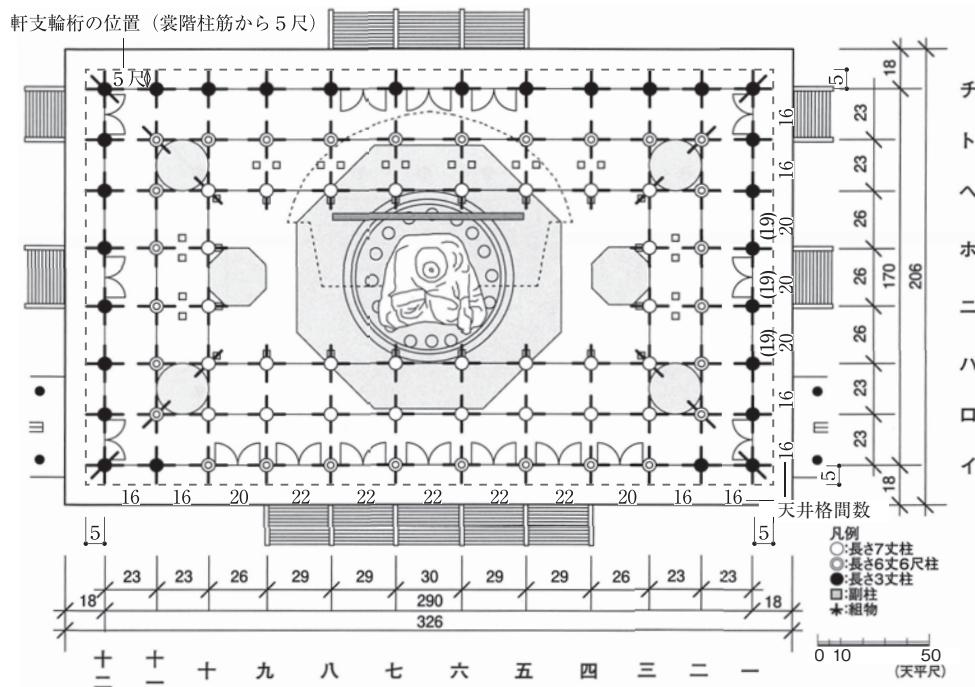


Fig. Appx. I -2-4 天平大仏殿 平面模式図 (軒支輪桁の位置と天井格間数) 1 : 1,000

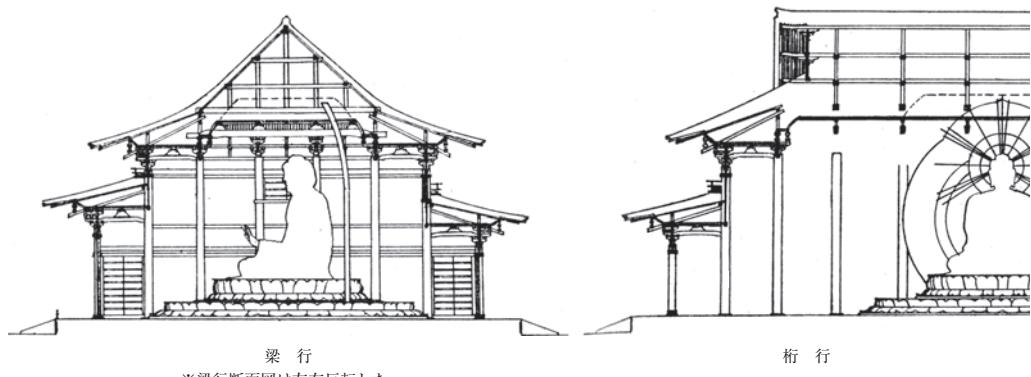


Fig. Appx. I -2-5 天平大仏殿 福山案復元断面図 1 : 1,000

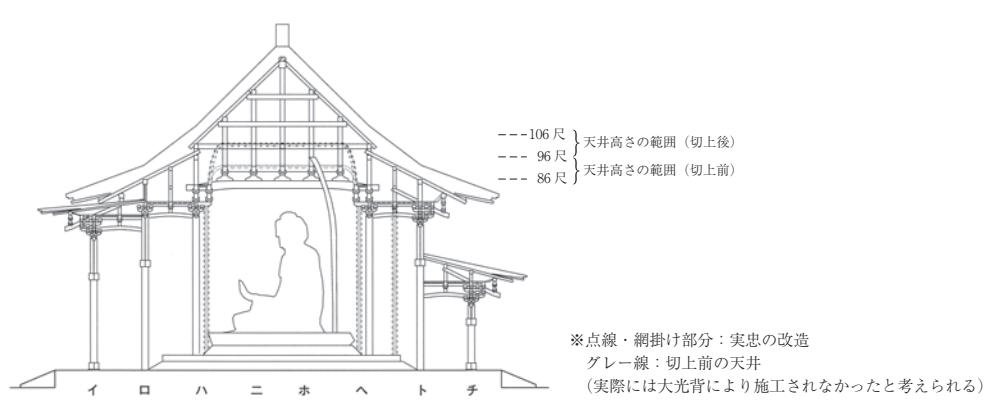


Fig. Appx. I -2-6 天平大仏殿 海野案復元断面図 1 : 1,000

ii 高さ

天平大仏殿の高さは5説あるが、そのうち126尺説と156尺説の2説に絞られる¹⁰⁾。高さの2説(126尺説・156尺説)は、文字上だけでは決められないと言う¹¹⁾。

iii 基壇

文献史料には基壇高が記載され、『紙本著色信貴山縁起』には基壇の外觀が描かれる。これらから、基壇高は7尺で、基壇外装は壇正積と考えられている¹²⁾。

iv 軸部

裳階柱筋は『紙本著色信貴山縁起』から、地長押・内法長押(幅4.0尺、成1.5尺)、頭貫で固められたと考えられている¹³⁾。なお、ここでは内法長押が柱天に取り付くように描かれており、先行研究では「上長押」などとも称される。これは、柱天に頭貫が、その下に内法長押が取り付く状態の描画を誤った可能性がある。

v 裳階柱筋～軒支輪桁

福山敏男は、正倉院文書から組物の詳細な検討をおこなった。正倉院文書「大仏殿廂絵画師作物功錢帳」(天平宝字3年3月日未詳、『大日本古文書』(編年)4巻、353-358頁)などに記される「須理板」は支輪板のことであり、天井の格間、支輪板、蓮花形の数からみて、「廂」は裳階を指すと言う。ここに、「合須理板捌伯拾陸枚〈各長三尺五寸／広一尺〉」とあるから、裳階の支輪板は816枚あり、それぞれ長さ3.5尺、幅1.0尺であることが知られる。裳階柱筋～軒支輪桁心を5.0尺と推定すると、軒支輪桁の周長は960尺となり、軒支輪子の心々間隔を1.2尺とみると、軒支輪子間は800間になると言う。これに、四隅の軒支輪間各4枚、計16枚を加算すると816枚となり、正倉院文書にみられる枚数と整合する。ここから、裳階柱筋～軒支輪桁心は5.0尺と考えられるとする。

vi 裳階軒小天井・裳階天井

同じく正倉院文書「大仏殿廂絵画師作物功錢帳」には、裳階軒小天井および裳階天井に関する記述がある。ここに、「彩色天井板花壱万拾壹区〈別方八寸〉」とあるから、これらの天井板のうち彩色が施された区画は全10,011区であり、1区(天井の格間)に径8寸の花が描かれたことが知られる。福山敏男は、ここから各区の内法を方8.5寸、組子幅を3.5寸、すなわち組子心々間を1.2尺と推定した。さらに、裳階の間口が214格間、奥行が124格間で、軒小天井は幅3格間と推定した¹⁴⁾。3格間分の幅は3.6尺(=組子心々間1.2尺×3格間)となる。

D まとめ

天平大仏殿は、発掘調査などから20.0尺以上の軒の出が想定される。文献史料から、すべての柱が下径3.8尺、上径3.0尺とされる。先行研究では、裳階柱筋～軒支輪桁心は5.0尺と考えられている。軒支輪板の長さは3.5尺であり、これは組物の手先間隔を検討する上で重要である。以上の前提条件と資料をもとに、天平大仏殿の裳階まわりの組物・軒を中心に検討する。

註

- 1) 遺構図は以下に載録されている。ここでは、「(昭和)卅三年八月の東大寺大仏殿東側の旧基壇跡発掘調査報告」が存在するとされるが、この報告は所在不明で実見が叶わなかった。
『重要文化財東大寺中門廻廊修理工事報告書』奈良県教育委員会文化財保存課、1961。
- 2) 延石の見込は1.7現代尺であり、そのうち0.3現代尺が地覆石と平面的に重複すると推定されている。す

なわち、地覆石外縁からの延石外縁の出(散り)は、1.4現代尺 \approx 1.4尺となる。

『重要文化財東大寺中門廻廊修理工事報告書』奈良県教育委員会文化財保存課、1961。

3) このほか、『東大寺要録』巻1 本願章「勝宝感神聖武皇帝菩薩伝(延暦僧録文)」などにも記載がある。

4) 『東大寺要録』巻2 縁起章「大仏殿碑文」などによれば327尺とされるが、『七大寺日記』「東大寺」によれば326尺とされる。なお、『東大寺要録』巻1 本願章「勝宝感神聖武皇帝菩薩伝(延暦僧録文)」にある「殿端東西石敷(径冊二／丈六尺)」は、「径冊二丈六尺」の誤写とみられている。

關野貞「天平創立の東大寺大佛殿及其佛像」『建築雑誌』16(182)、48-61頁、建築学会、1902。關野貞「天平創立の東大寺大仏殿及其佛像(承前)」『建築雑誌』16(183)、81-95頁、建築学会、1902。初出は、關野貞「創立當時の東大寺大佛殿及其佛像」『史學雑誌』(12)12、34-91頁、史学会、1901。

5) 『東大寺造立供養記』には「昔柱口径三尺五寸」とあり、この範囲に収まる。

『東大寺造立供養記』『東大寺叢書1』大日本佛教全書121、47-57頁、佛書刊行会、1915。

6) 関野貞と福山敏男は、組物の描画が省略された描法であると言う。関野貞は唐招提寺金堂と大差ない形式と言い、福山敏男は軒支輪が存在することから、唐招提寺金堂のような三手先組物を想像して良いとする。

7) 關野貞「天平創立の東大寺大佛殿及其佛像」『建築雑誌』16(182)、48-61頁、建築学会、1902。關野貞「天平創立の東大寺大佛殿及其佛像(承前)」『建築雑誌』16(183)、81-95頁、建築学会、1902。初出は、關野貞「創立當時の東大寺大佛殿及其佛像」『史學雑誌』(12)12、34-91頁、史学会、1901。

福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大佛殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、14-34頁、毎日新聞社、1952。

山本栄吾「東大寺創建大仏殿復原私考」『日本建築学会論文報告集』(69)、741-744頁、日本建築学会、1961(DOI https://doi.org/10.3130/aijsaxx.69.2.0_741)。

このほか、伊藤延男は大仏背後の山の築造に着目した検討をおこない、復元平面図・復元断面図を作成した。

伊藤延男「大仏背後の山」『佛教藝術』(131)、86-91頁、毎日新聞社、1980。初出は、伊藤延男「大仏背後の山」『研究論集 I』奈良国立文化財研究所学報(21)、1-23頁、奈良国立文化財研究所、1972。

8) 海野聰「東大寺創建大仏殿に関する復原私案 組物・裳階と構造補強」『文化財論叢IV』奈良文化財研究所学報(92)、797-824頁、奈良文化財研究所、2012。

9) 『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究2木部』奈良文化財研究所学報(81)、奈良文化財研究所、2010。

10) 山本栄吾「東大寺大佛殿高さの疑い」『日本建築学会研究報告』(30)、1-4頁、日本建築学会、1955。

11) 福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大佛殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、14-34頁、毎日新聞社、1952。

12) 關野貞「天平創立の東大寺大佛殿及其佛像」『建築雑誌』16(182)、48-61頁、建築学会、1902。關野貞「天平創立の東大寺大佛殿及其佛像(承前)」『建築雑誌』16(183)、81-95頁、建築学会、1902。初出は、關野貞「創立當時の東大寺大佛殿及其佛像」『史學雑誌』(12)12、34-91頁、史学会、1901。

福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大佛殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、14-34頁、毎日新聞社、1952。

13) 福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大佛殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、1952。

14) 海野聰は、組子心々間を1.2尺とみる点については福山敏男に倣うが、軒小天井を幅2格間に改めた。これによれば、2格間分の幅は2.4尺(=組子心々間1.2尺 \times 2格間)となるが、想定される裳階柱筋~二手目(軒支輪桁心)の5.0尺に対して著しく狭く、組物として成立し難いと考える。そのため、ここでは福山敏男の案を参考にする。

海野聰「東大寺創建大仏殿に関する復原私案 組物・裳階と構造補強」『文化財論叢IV』奈良文化財研究所学報(92)、797-824頁、奈良文化財研究所、2012。

福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大佛殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、14-34頁、毎日新聞社、1952。

3 復元

ここでは、天平大仏殿の裳階まわりを復元する。平面は、第2節で述べた発掘調査や先行研究にもとづく。それ以外の高さや主な構造形式について、先行研究を踏まえ検討する。ただし、主屋の屋根形式や細部などについては未検討である。なお、天平大仏殿の基準尺は、天平塔に倣い1尺=0.295mとする。

A 主屋の高さ

第V章では、文献史料の写本にもとづき、天平塔の全高を検討した。ここでは、同様の対象・方法で、天平大仏殿の主屋の高さを確認する。第2節で取り上げた資料のうち、①の各写本を確認した(図版第一・四~一五図)。第V章で述べたように、天平塔の全高は写本から絞り込むことができた。一方で、天平大仏殿の主屋の高さは写本でも126尺説と156尺説の2説が併存していた。今回、詳細には検討しておらず、絞り込むことができなかつた¹⁾。天平大仏殿の高さは、大仏光背の高さとの関係から議論されてきたため、これらを整理した(Table Appx. I-3-1)。このうち、写本のほとんどが近世以降となる『朝野群載』の諸写本は図にまとめた(Fig. Appx. I-3-1)。

Table Appx. I-3-1 大仏殿碑文の各写本における天平大仏殿の「高」

史料	写本(翻刻本)	天平大仏殿	光背(円光)
東大寺要録	醍醐寺本	高十二丈六尺	高十一丈四尺
	(筒井英俊校訂国書刊行会本)	高十二丈六尺	高十一丈四尺
三条西本		高十二丈六尺	高十一丈四尺
葉室本		高十二丈六尺	高十一丈四尺
豊富崎本		高十二丈六尺	高十一丈四尺
東山本		高二丈六尺	高十一丈四尺
紅葉山本		高二丈六尺	高十一丈四尺
朝野群載	伴信友本	高卅二丈六尺	高十一丈四尺
	林崎本(甲)	高十五丈六尺	高十一丈四尺
	林崎本(乙)	高二丈六尺	高十一丈四尺
	林崎本(丙)	高二丈六尺	高十一丈四尺
	(新訂増補国史大系本)	高十五丈六尺	高十一丈四尺
	(改定 史籍集覽本)	高十五丈六尺	高十一丈四尺
金勝院本		高十五丈六尺	高十一丈四尺
扶桑略記抄	新井白石旧蔵本	高十五丈六尺	高十一丈四尺
	(新訂増補国史大系本)	高十五丈六尺	高十一丈四尺
七大寺日記	教王護国寺觀智院旧蔵本	高十五丈六尺	高十一丈四尺
	(『校刊美術史料』)	高十五丈六尺	高十一丈四尺

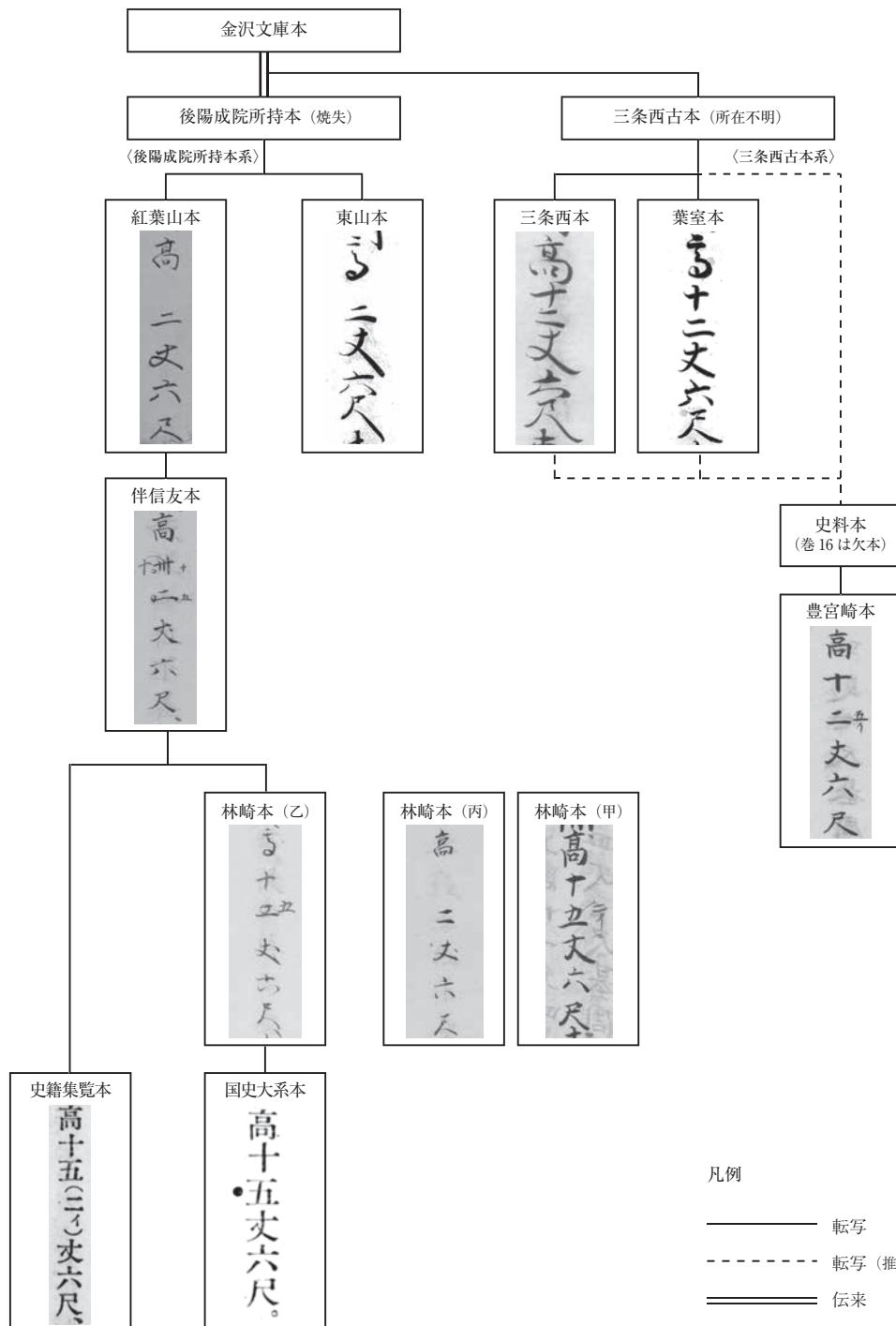


Fig. Appx. I -3-1 『朝野群載』写本系統図と天平大仏殿の「高」

B 軸 部

柱 第2節で述べたように、『七大寺巡礼私記』「東大寺高広丈尺柱戸棟等事」には、柱径が記載されている²⁾。ここから、天平大仏殿のすべての柱径は下径が3.8尺、上径が3.0尺と考える。後述するように、天平大仏殿では台輪を用いない。そのため、柱天には唐招提寺金堂にみられるよう

な小さな丸面を付ける。なお、柱径と大斗幅は近似することが知られており³⁾、柱径から組物の部材寸法を窺い知ることができる。また、裳階と主屋は柱径が同寸であるから、組物の部材断面寸法などについても、裳階と主屋とで同じ規格と考えられる。

柱以外 柱のほかは、朝護孫子寺所蔵『紙本著色信貴山縁起』(図版第37図)、先行研究および現存する古代の仏堂にもとづき、裳階では地長押・内法長押・頭貫を回し、台輪を用いない。唐招提寺金堂は、長押が幅(長押外側間)2.7尺(現状)、成0.65尺で、頭貫が幅0.75尺程度、成0.85尺程度である。唐招提寺金堂の柱径は2.0尺であり、第C項で述べるように柱径の比から、天平大仏殿ではこの1.5倍(=3.0/2.0)程度が想定される。天平大仏殿では柱径を考慮して、地長押を幅(長押外側間)5.0尺、内法長押を幅(長押外側間)4.0尺とし、これらの成を1.0尺とする。これは、第2節で述べた先行研究で指摘される寸法とは、内法長押の幅が共通するものの、地長押の幅は1.0尺大きく、それ以外は小さな寸法となった。また、頭貫は幅1.15尺、成1.25尺とする。

C 組 物

i 方 法

天平大仏殿は、正倉院文書から軒支輪が備わることが判明する。ただし、大規模なため、四手先も想定された。唐招提寺金堂は、軒支輪付きの三手先組物が備わる現存最古の仏堂であり、奈良時代後期の木割を考える上で重要である(図版第62図)。そこで、唐招提寺金堂の木割をもとに、復元図を作成しながら検討をおこなう。天平大仏殿の柱径(上径)3.0尺は、唐招提寺金堂の柱径2.0尺の1.5倍(=3.0/2.0)の大きさである。唐招提寺金堂を参考として、他の寸法についてもこの倍率で拡大した大きさを目安として、第2節で述べた先行研究で指摘される寸法(裳階柱筋～軒支輪桁心5.0尺など)との整合性を確認する。

ii 裳 階

a 組物形式

手先数 第2節で述べたように、正倉院文書には軒支輪の記述がある。これは、日本建築史における軒支輪の初出である。想定される裳階の軒支輪桁の周長(960.0尺)と軒支輪板の幅(1.0尺)からみて、軒支輪板の枚数(816枚)は1段分であり、喜光寺本堂や金峯山寺本堂などにみられるような軒支輪と尾垂木が各2段に重なる四手先組物にはならない(図版第64・65図)。これは、『紙本著色信貴山縁起』に描かれる尾垂木が、各組物に1本であることとも整合する。

四手先組物には、教王護国寺金堂のように、尾垂木と軒支輪が各1段の形式も存在する(図版第66図)。しかし、後述するように裳階柱筋～二手目が5.0尺であり、軒支輪桁の周長からみて二手目に軒支輪桁が載る。すなわち、裳階は尾垂木と軒支輪が各1段備わる三手先組物と考えられ(Fig. Appx. I -3-2)、四手先組物にはならない。

実肘木 実肘木の有無は判然としない。第VI章で述べたように、唐招提寺金堂以降の軒支輪付きの三手先組物には実肘木が備わる。さらに、実肘木は丸桁の継手を支持する点や、軒を支持する部材断面成の確保の点で、構造的に有利である。ここでは、破格の規模である天平大仏殿では、実肘木が導入されたと考える。なお、第VI章で述べたように、軒支輪付き三手先組物で実肘木のない形式を想定すると、軒支輪子が三手目の三斗と干渉するため、やや複雑な納まりとならざるを得ない点からも、実肘木が備わると考えて妥当である。

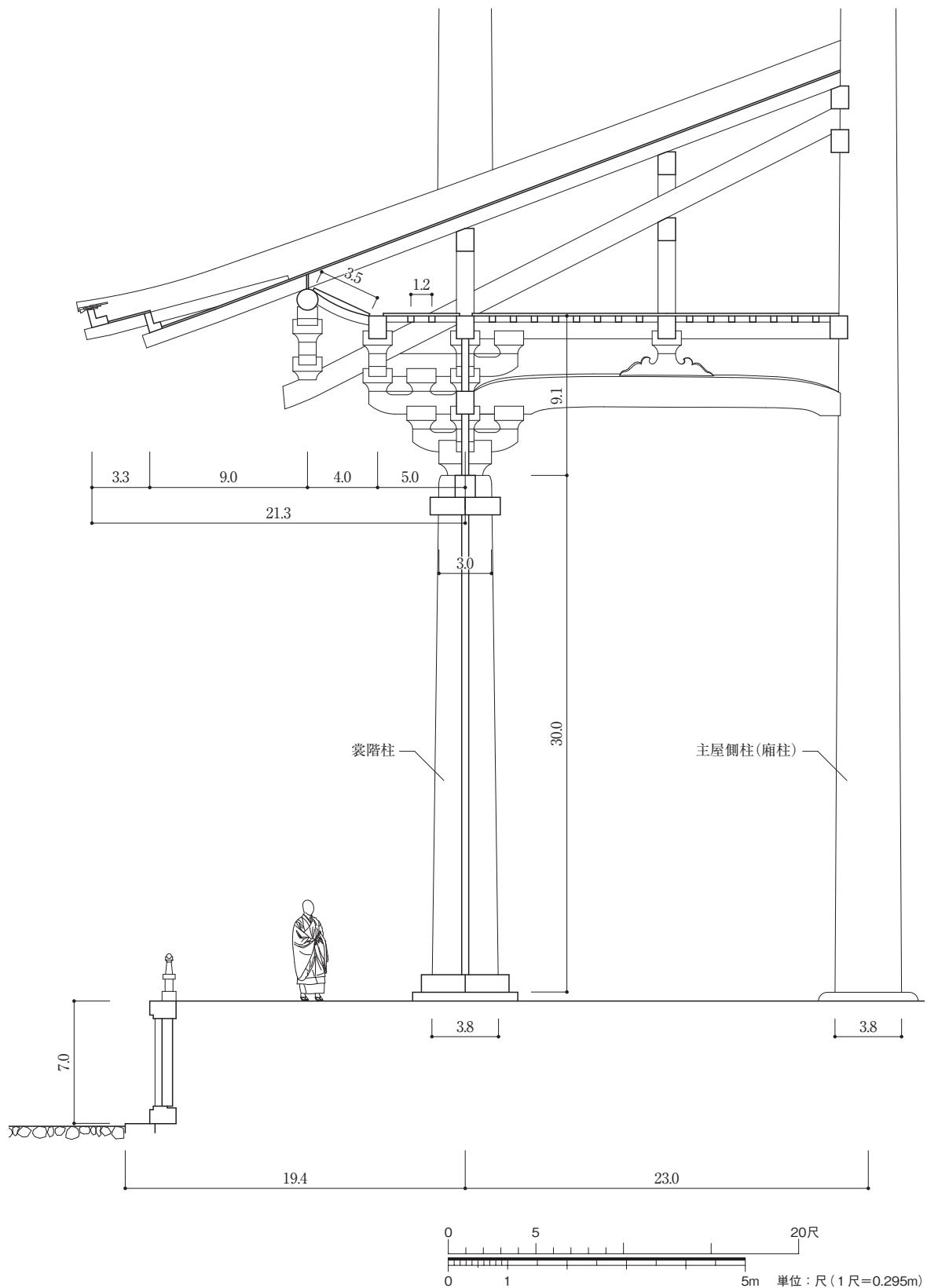


Fig. Appx. I -3-2 天平大仏殿蒙階まわり 復元梁行断面図 1:100

b 水平方向

裳階柱筋～二手目 正倉院文書の検討から、裳階柱筋～軒支輪桁心は5.0尺と考えられている。

唐招提寺金堂の側柱筋～二手目は3.3尺で、この1.5倍は4.95尺であり、前述した5.0尺に近似する。よって、天平大仏殿の裳階柱筋～軒支輪桁心(二手目)は、前述した5.0尺で妥当であり、ここでも5.0尺と考える。また、天平大仏殿の裳階の軒支輪桁は、二手目通肘木と考えて誤りない。

裳階柱筋～一手目 裳階柱筋～一手目は、唐招提寺金堂に倣い裳階柱筋～二手目の半分と考え、2.5尺とする。

二手目～三手目 唐招提寺金堂の二手目～三手目は2.4尺で、この1.5倍は3.6尺である。唐招提寺金堂は肘木幅0.7尺、丸桁径0.8尺であり、この1.5倍は1.05尺、1.2尺である。唐招提寺金堂を単純に1.5倍した二手目～三手目の内法間隔は、約2.5尺となる。一方で、正倉院文書に記される天平大仏殿の軒支輪板の長さは3.5尺であり、この手先間隔(内法)より1尺ほど長い。

ここでは、正倉院文書に記される軒支輪板の長さを根拠として、また一般に組物の手先間隔は時代が降ると二手目～三手目が縮小し、他の手先間隔に等しくなる傾向を踏まえ、天平大仏殿の二手目～三手目を4.0尺(内法2.85尺)とする⁴⁾。これは、唐招提寺金堂を単純に1.5倍した3.6尺よりも大きく、古式を表す。このとき、二手目～三手目の手先間隔が大きいことは否めない。しかし、第VI章で述べたように、現存する古代の三手先組物の割合の範囲内で(Table VI-3-16)、問題ないと考える。

ここから、裳階柱筋～丸桁心は9.0尺、丸桁対辺間は間口で308.0尺、奥行で188.0尺となる。

一の肘木長 唐招提寺金堂の一の肘木長は4.0尺であり、この1.5倍は6.0尺である。よって、天平大仏殿の一の肘木長は6.0尺の完数と考える。

大斗幅 第B項で述べたように、大斗幅は柱径と同寸と考える。天平大仏殿は大規模で、柱の下径と上径の差が大きい。そのため、天平大仏殿では組物に近い上径に揃え、大斗幅を3.0尺とする。

巻斗幅 唐招提寺金堂の巻斗幅は1.1尺、斗尻幅は0.7尺であり(Fig. VI-3-26)、この1.5倍はそれぞれ1.65尺、1.05尺である。ここから、天平大仏殿の巻斗幅は1.67(5/3)尺、斗尻幅は1.0尺とする(Fig. Appx. I-3-3)。一の肘木に巻斗を並べると、三斗の幅は6.67(20/3)尺となる。また、唐招提寺金堂と同様に、巻斗間の内法は巻斗幅の1/2となる(0.83(5/6)尺)。

c 垂直方向

部材成 唐招提寺金堂の大斗の成は1.3尺であり、この1.5倍は1.95尺である。ここから、天平大仏殿の大斗の成は、2.0尺とする。これ以外の部材寸法も、唐招提寺金堂の1.5倍を目安とする。唐招提寺金堂の巻斗と肘木の成は同寸の0.85尺であり、この1.5倍は1.275尺である。ここから、天平大仏殿の巻斗と肘木の成は、1.3尺とする。

斗の敷面高 第VI章で述べたように、唐招提寺金堂の斗の敷面高は、他の同時代の斗と垂直方向の比例が異なる(Table VI-3-17)。そこで、奈良時代の斗の形状として、天平大仏殿の斗の敷面高は、成の2/3と考える⁵⁾。ここから、大斗敷面高を1.35尺、巻斗敷面高を0.85尺とする。

組物積み上げ高さ 前述した斗の敷面高と肘木成にもとづけば、組物積み上げ高さ(大斗尻～四の肘木天端)は9.1尺となる。これは、唐招提寺金堂の組物積み上げ高さ6.35尺の1.5倍である9.5尺より小さい。

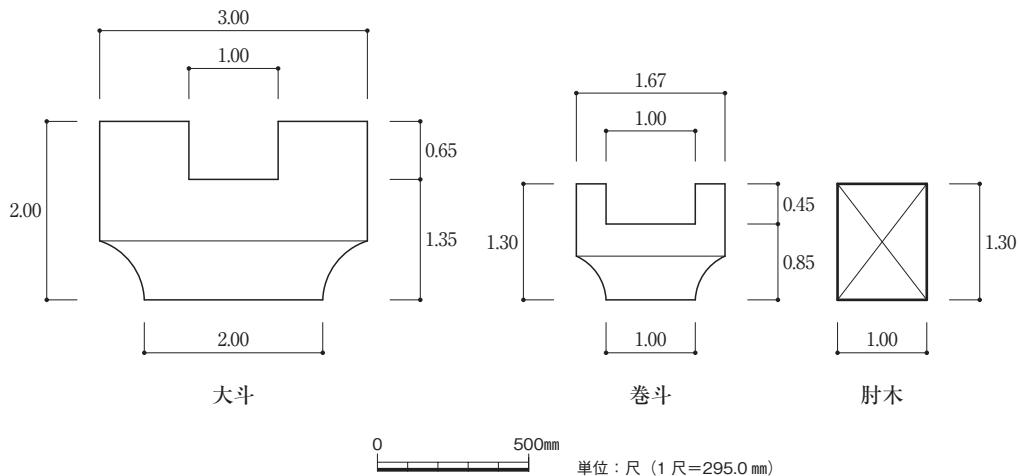


Fig. Appx. I -3-3 天平大仏殿 組物部材断面寸法 1 : 25

d 尾垂木勾配

第VI章で述べたように、唐招提寺金堂の尾垂木は、二手目秤肘木の断面中心と上段壁付通肘木の内上角を結ぶように架けられる。この架け方に倣うと、天平大仏殿は唐招提寺金堂よりも組物積み上げ高さに対する柱筋～二手目が大きいため、引通勾配が約5.1寸で唐招提寺金堂の5.5寸より緩勾配となる。

軒小天井直下に卷斗が存在したとすると、卷斗は斗線にまで及ぶ極めて大きい含みを想定せねばならない。そのため、軒小天井直下に卷斗は存在しなかったと考える。

e 繫虹梁・裳階天井桁

先行研究が指摘するように、裳階柱と主屋側柱(廊柱)は柱高が異なる。側柱(廊柱)と入側柱(身舎柱)とで柱高が異なる唐招提寺金堂を参考に、二の肘木を繫虹梁として主屋側柱に挿す。繫虹梁の中心に板幕股を置き⁶⁾、裳階天井桁となる四の肘木を受ける形式とする。この板幕股には、さらに桁行方向の天井桁を載せる⁷⁾。裳階天井桁は、裳階柱筋では上段壁付通肘木に、主屋側柱筋では主屋側柱に対して、長押状に打たれる天井廻縁にかかる形式を想定する⁸⁾。この場合、唐招提寺金堂と異なり、天井桁の両端が各柱筋に通る通肘木で支持されないこととなる⁹⁾。よって、裳階天井の中心は、主屋側柱の分、裳階の中心よりやや外側の位置となる¹⁰⁾。

なお、主屋側柱筋では、裳階天井より上に垂壁小壁が造られた可能性があるが、ここでは組物の検討が主眼であり、未検討である。

f 中備

中備は、『紙本著色信貴山縁起』から間斗束と考える。唐招提寺金堂のように、壁付通肘木の上下2段に間斗束を立てる。

iii 主屋

主屋の組物形式は不詳である。組物の部材寸法などは、第B項で述べたように、裳階と同じ規格と考えられる。主屋の組物は、四手先など、裳階より多い手先として意匠面での格を上げた可能性は否定できない。しかし、天平大仏殿の場合、裳階があるため主屋の軒先は基壇の外まで出る必要はなく、構造面、機能面で四手先以上とする積極的な理由は見出せない。

D 軒

i 裳 階

天平大仏殿の裳階の軒は、『紙本著色信貴山縁起』および類例建物から、二軒の地円飛角と考える。第VI章で述べたように、木負下角は基壇縁に揃うと考える。裳階柱筋～木負下角は18.0尺となる。このとき、裳階柱筋～丸桁心と丸桁心～木負下角が同寸となる。これは、第VI章で述べた類例建物の傾向に符合し(Table VI-3-20)、特に奈良時代末期建立の元興寺極楽坊五重小塔と類似する。

木負下角～茅負下角は、単純に唐招提寺金堂の1.5倍であれば、4.2尺となる。しかし、ここまで大きくなくとも、軒先を石敷まで出すことは十分に可能である。また、桔木なしで飛檐軒を4.2尺出すのは構造的に困難と考える。大規模な二軒であるものの、三軒などを想定しなくとも、軒の出は石敷まで届く。ここでは二軒とし、飛檐垂木の実長を鑑みつつ、垂木間隔との均衡などから木負下角～茅負下角を3.3尺とする。ここから、軒の出は21.3尺となる。

天平大仏殿の裳階は、軒の出に対して裳階柱筋～丸桁心と丸桁心～木負下角が42.3%、木負下角～茅負下角が15.5%となる。軒の構成としては、第VI章で述べた類例建物の割合と比して、木負下角～茅負下角の割合がやや小さいものの、さほどかけ離れたものではなく妥当であると考える。軒の出が巨大な建物では、木負下角～茅負下角の割合が小さくなることが考えられる。

ii 主 屋

天平大仏殿は、裳階の柱間寸法が主屋の廊の柱間寸法と同寸であり、主屋の側柱筋から石敷までは42.4尺ある。主屋の軒は、裳階があるため石敷まで出る必要はない。詳細は未検討である。

E 造 作

a 裳階天井

裳階天井は、文献史料や類例建物から組入天井とする。先行研究に倣い、組子は方3.5寸、各格間の内法は方8.5寸で、組子心々は1.2尺と考える¹¹⁾。第C項で述べたように、裳階天井の中心は、裳階の中心よりやや外側の位置となる。ここでは、繫虹梁に載る板幕股を裳階の中心に置く。すなわち、板幕股の外側と内側とで、天井の内法が異なる¹²⁾。ここでは、天井廻縁を天井桁(肘木)と同断面とし、天井組子の割り付けは、心々を1.2尺として仮に描画した¹³⁾。

b 柱間装置

『紙本著色信貴山縁起』および先行研究に倣い、正面の両端各2間は壁、中央の7間は内開き板棧戸と考える。

c 高 欄

『紙本著色信貴山縁起』には、基壇縁に刎高欄が描かれる¹⁴⁾。この刎高欄は平安時代の後補材と考え、ここでは水平材の端部に反りのない組高欄を立てる。組高欄は、地覆、平桁、架木の水平部材と、斗束、込栱の垂直部材からなる。なお、地覆、平桁間に横連子などの組子を入れない。

F 飾金具と彩色

『紙本著色信貴山縁起』から、長押、垂木、板棧戸、高欄などに飾金具を取り付ける。また、木部は赤色、壁は白色とする。裳階正面外部の中備の間斗束の両脇には、笈形文様を施す¹⁵⁾。

註

- 1) ただし『朝野群載』の写本では、林崎本(甲)のみ「高十五丈六尺」とされ、「五」の脇に「ニイ」と朱書きされる。なお、「五」と「二」は上下に横線が引かれる文字形状という点で共通する。
- 2) 『東大寺造立供養記』に「昔柱口徑三尺五寸、今五尺也」とあり、これとほぼ一致するから、信頼をおくと考えられている。
福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大佛殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、14-34頁、毎日新聞社、1952。
- 3) 『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究2木部』奈良文化財研究所学報(81)、奈良文化財研究所、2010。なお、第VI章でもその傾向を追認した。
- 4) 鈴木嘉吉委員長から、軒支輪板が長いため、奈良県所蔵「南都元興寺大塔式拾歩一図」(図版第43図)に描かれる元興寺五重塔のような、軒支輪桁に尾垂木を置く組物形式の可能性の指摘を受けた。しかし、丸桁をより外側に出すことができる形式は唐招提寺金堂の形式であり、また第VI章で述べたように、時代が降ると尾垂木の設置位置が上昇する傾向も鑑みて、軒の出が大規模な天平大佛殿の復元では、唐招提寺金堂の形式を参考として復元図を作成した。軒支輪桁に尾垂木を置く組物形式については、付章IVで検討をおこなう。なお、唐招提寺金堂の軒支輪板の長さは2.0尺であり、この1.5倍は3.0尺で、3.5尺に満たない。
- 5) 海野聰は、実忠が補足した副柱も含め、3つの柱高の各差が4尺となることに着目した。これは、組物の垂直方向の寸法を検討する上で重要な指摘である。ただし、尺単位の寸法の記載であり、尺未満の詳細な検討は困難であった。
海野聰「東大寺創建大佛殿に関する復原私案 組物・裳階と構造補強」『文化財論叢IV』奈良文化財研究所学報(92)、797-824頁、奈良文化財研究所、2012。
- 6) 海野聰は、板棊股でなく間斗束を立てる形式で復元図を作成した。ただし、今回は装飾的な仕様として、唐招提寺金堂に倣い板棊股とした。
海野聰「東大寺創建大佛殿に関する復原私案 組物・裳階と構造補強」『文化財論叢IV』奈良文化財研究所学報(92)、797-824頁、奈良文化財研究所、2012。
- 7) 唐招提寺金堂では、板棊股に桁行方向の棟(中間桁)が載る。天平大佛殿は大規模なため、これを肘木と同断面の天井桁とした。
- 8) 詳細については未検討である。なお、福山敏男は主屋側柱筋に桁行方向の天井桁を渡す案を作成した。この天井桁が、垂壁小壁の壁受けともなる。
福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大佛殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、14-34頁、毎日新聞社、1952。
- 9) 正面中央7間での裳階切り上がり部分については未検討である。
- 10) 第E項で述べる天井の格間数に影響する。
- 11) 福山敏男と海野聰は、この規格で裳階の梁行方向を16格間と想定した。福山敏男は、柱間中央に十字に棟を渡すため、格間は偶数であるとする。ただし、海野聰は柱間26尺のところで19格間と推定し、桁行方向に必ずしも棟は必要ないとする。
福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大佛殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、14-34頁、毎日新聞社、1952。
- 12) その影響で、裳階の中心を境とした外側と内側とで、梁行方向の格間数が異なることが予想される。
- 13) ここでは組物の検討が主眼であり、天井の細部については未検討である。
- 14) 高欄が開放する端部から階段耳石までは柱間1間分あいており、この描画には疑問が残るとされる。
關野貞「天平創立の東大寺大佛殿及其佛像」『建築雑誌』(182)、48-61頁、建築学会、1902。
- 15) 復元立面図は作成していない。なお、『紙本著色信貴山縁起』では、裳階柱上の組物の両脇に、笈形文様が描かれる。ただし、これは間斗束の両脇の笈形文様を絵師が描き誤ったものとみられている。
福山敏男『寺院建築の研究 中』福山敏男著作集2、中央公論美術出版、1982。初出は、福山敏男「東大寺大佛殿の第一期形態」『佛教藝術』(15)、14-34頁、毎日新聞社、1952。

4 まとめ

天平大仏殿の裳階は、軒支輪付きの三手先組物、二軒の地円飛角と考えられる。軒の出は、21.3尺程度とみられる。主屋は組物形式が四手先以上で、軒の出が裳階より大規模となった可能性は否めない。しかし、裳階があるため主屋の組物の手先を増やし、軒の出を大規模にする積極的な理由は見出せない。なお、すべての柱径が同寸であるから、組物の部材断面寸法の規格などは主屋と裳階とで同一と考えられる。以上、本章は天平塔の類例である、同時代・同境内の天平大仏殿について検討をおこない、天平塔の復元の基礎資料を得た。